
青色の空

syuhugenki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青色の空

【Nコード】

N4349L

【作者名】

syuhugengi

【あらすじ】

空を見ようと、彼は言った。

私はつられて、空を見上げた。

青い空。何時だって見える、有り触れた光景。

だけど私は——その時に初めて、空を美しさを知った。

1 出会い

——辛い時期があった。

それは私がまだ、自分の中にあつた才能に気づいたばかりの頃。

幼かった私は、一人で全てを抱え込むこともできなかった。大きくともすれば押し潰されてしまいそんな重圧感。

おかしなものを持ち合わせてしまったために、おかしなものを視る羽目になった、不幸。

かと言って、両親に事情を話せるはずもない。

ある程度理解のある親ではあったが、これはそういうのとはまた別の問題だ。

思いつく限りでは、親類にも適当な相談相手はいない。返答を貰えるどころか、己の年を鑑みれば、悪ふざけと思われ信じてもらえるかすら危ういものである。

どうすべきか悩んだ私は、結局何の血の繋がりも無い赤の他人——

——時折公園で出会っては遊ぶだけの、

名前も知らないとある少年に全てを打ち明けることにした。

「——なるほどね。確かにそれは、特異な才覚だ」

どこの公園にでもある、有り触れた木製のベンチ。

天候は良く、見渡す限りの空には一つの雲も見当たらない。

穏やかな陽気に包まれながら、私の告白を聞いた少年は、納得したように何度も頷いた。

「…信じて、くれるんだね」

「そりゃね。何度か会って、君が嘘を吐ける程器用な人間じゃない

のはわかつてるから」

「でも、嘘をついていなくても、勘違いしているかもしれないですよ？」

私とて確たる自信は持てなかった。全ては、私自身の生み出した妄念なのではないか。

脳という檻の中でのみ循環する、悪夢ではないのか。

そう思えたこともあったし、そう思った方が、ずっと気が楽だった。

「勘違い、してるの？」

「ううん、してない…と思う」

「ならしてないのさ。世間は嘘やら信じられないことで塗れているからね。」

せめて自分のことぐらいは、信じてやらないと」

彼の言うことは、簡単なようですごく難しい。

どこか大人びて見えたのは、そういう言動故だったのかもしれない。

「でも、まあ。君の才能はあまりにも珍しいものだから、信じられなくても無理はないね。」

予兆とか、予感とか、そういうのはなかったの？」

「なかった、こともなかった気がする。何かおかしい感覚が自分の中にあっただのは、」

ずっと前から知っていたから」

ただ、それは物心ついた時には既にあっただもの。

だから特別だとは思わなかった。これも含めて私自身なのだと、周りの人たちもそういう感覚を誤魔化して生きているのだと、そう思ったのだ。

「辛い？」

「…辛いよ。だって私は、そのせいで人より多く悲しまなきゃいけないから」

祖父の死。視た後に見る。

そんな未来は知りたくもないっていうのに、二度も見なくてはならない。

今回はまだ一度目だから大丈夫だけれど。これから先ずっとそうだと思うと、苦しくなる。

——それに。

もしも私が観測することで、その人の未来が決定されてしまうのだとすれば。

この才能は神をも墜とす。人の身には過ぎた、持つてはいけないモノ。

「——じゃあさ、空を見よう」

「空？」

「そう、空」

彼は頷いて、空を見上げた。

つられて見上げる。青い。そして、広大な空。

「空は、何時でも見ることできて、時間ごとに模様が変わるから飽きない。」

他のものを見たくないときには、うつてつけだろ？」

そう言つて、少年は薄く笑った。

青い風景の中を、白い雲が流れていく。何気なく見ることはあつても、このように意識して空を仰ぐのは久しぶりだった。

特別ではない、何時だって見ることのできる景色。

なのに、この時に限つて空がとても尊く——美しいものに、私には見えた。

「才能は、その人を幸せにするためにあるものだと思つて。」

見知らぬ誰かのためとかじゃない。才能を持つ当人が幸せになれないのなら、才能に興味なんてないんだ。

だから、君が自分の才能をもし不幸だと感じているなら、直視しないのも君の意志だ」

「私の、意志」

「僕も君も、弱くて脆い‘人間’なんだ。

嫌いなものもあれば、どうしても苦手なことだってある。

逃げるな、なんて残酷なことは言わない。君は——君の思う通りに、生きればいい」

——その言葉が、私の生きる指針となった。

思う通りに生きる。自分の意思で、自由に、生きればいい。

彼は人の弱さを肯定し、その上で私に、新しい道を教えてくれた。

「……そうだ、名前」

「名前？」

「うん。まだあなたの名前、聞いてなかった」

「ああ、そういえば、そうだったっけ」

自己紹介なんてすっかり忘れていたと、彼は快活に笑う。
そして、右のポケットから手を引き抜き。

「佐藤和馬。よろしく」

「…うん。よろしく、カズマくん」

忘れることの無い握手を、私達は交わした。

2 九浄小夜

／十二月十三日

寒空を見上げて、息を吐く。

吐き出した息は白く曇り、溶けるよう大気に掻き消えていく。

冬は嫌いじゃない。少なくとも、夏よりは好きだ。

寒さは世界と自身との境界を明確にしてくれるし、白い息はそれだけで、

確かに自分がここにいるという証明になる。

後には何も残らない、一時だけの微かな証だけれど。
縫れるものが何もないよりかは、ずっと安心できる。

「空が、青いなあ……」

当たり前のことを、ぼんやりと呟く。

空が青いのは、確か光の波長だとか反射とかが関係してそう見えるらしいのだが、

そんなことを知らなくても、空はやはり青いままだ。

理由など必要ないのだ。全てのものは唯あるがままに、そうであるべくしてそこに存在している。

それを科学やら化学やらで解明し、分解しようとするからおかしなことになるのだ。

空は青い。その程度、幼子でも知っている。

理屈を捏ねたところで、見えるものに変化が起こるわけでもない。

一面の青空は綺麗だ。雲一つ無い晴天の日は、気分が良い。それだけわかっていれば十分じゃないかと、そう思う。

「は、あ」

もう一度大きく息を吐いた。

寒い。冬が嫌いではないと言っても、寒さに慣れているわけではない。

十二月上旬。それにしても、今日は一段と冷え込んでいる。

面倒臭がらないで、せめてマフラーくらいは巻いてくればよかった。

この気温で手袋だけなのは少し心許ない。

そつえば、仕舞ってある冬用のコートを出しておくのも忘れていた。

家に帰ったら出しておかねばならない。

まあ、放課後までそのことを覚えていれば、だけれど。

ゆるゆると歩道を歩く。

時刻は、もうじき八時半にさしかかる頃だろうか。

予鈴がなるのはちょうどその時間。今となっては、どんなに急いでも遅刻は免れまい。

それを承知で、いつもより二十分も遅く家を出たのだから、別段焦る事もないのだが。

「…何だか、なあ」

妙に心がそわそわとしている。

きっと、学校に遅刻してはならないという、固定観念じみた何かが胸の内で蠢いているせいだろう。

こつという焦燥感は、何となく気が滅入る。

横断歩道を渡って、学校へと続く狭い小道に入った。
聞き慣れたチャイムの音が耳に届く。学校までは後歩いて数分の距離。

完全な遅刻である。しかし急ぐつもりもない。むしろ、予鈴に間に合ってしまったら目的が達成されないのだから、急いではならないのだ。

学生らしからぬ行動であると思うし、その自覚もある。無遅刻無欠席の記録もこれでパーになった。

別に構いやしない。今通っているのも、せめて高校ぐらいは卒業しなければならぬだろうという責任と、
受かってしまった惰性で続いているようなものだ。

明日退学になってしまっても、困りはしないだろうと思う。

路地から、少しばかり開けた場所に出る。

そこにあるのは、小さな公園。滑り台と、木製のベンチだけが置いてある、

子供の遊び場として考えても広くは無い空間。

本来は幼児向けに作られたであろうこの公園も、

外で遊ぶという習慣自体が希薄になっていて現代においては、
高校生たちが集まってダベるだけの集会所になっている。

近くにコンビニエンスストアがあるのも手伝っているのだろう。
放課後になってからここを通れば、時折笑いながら歓談をしている制服姿の生徒たちが見受けられる。

寂れた公園。この時間帯、ここを使う人間などまずいない。

ただでさえ冬場で身を切るような寒さなのだ。

好き好んで外に出る物好きも少ないだろうし、うちの生徒たちのほ

とんどもは、予鈴までに登校する真面目君である。

——だから。

この時間、ここにいるのは、いつも決まった一人だけ。

そこに彼女はいた。

ベンチの端に腰を落ち着け、傍目からでは呼吸をしているのか危ういと思える程身じろぎをせず、ぼうとただ空を眺めている。

いや、彼女が本当に空を眺めているのかすら、俺は知らない。

もっと別の物を見ているのかもしれない。もしかすると、何も見ていないのかもしれない。

視線の先に空があったところで、意識していなければ見えていないのと同義だ。

見ているのに見えていない。聞いているのに聞こえていない。

それは矛盾しているようで、どこでも起こりうる、有り触れたこと。

——九淨小夜。

それが彼女の名だ。肩に触れるくらいまで伸びた長い黒髪と、人形のように整った顔立ち。

着ているのは我が校の制服で、そこいらの高校とほとんど違いの無い簡素なブレザー服。

防寒着らしいものは身に着けていないのに、それでも尚全く寒がる気配が無いせいか、

まるで等身大のマネキンがそこにあるだけのような、彼女自身を含めて風景の一部であるような、存在の希薄さを感じさせる。

彼女の素性がある程度知っているのは、何も知り合いだからではな

い。

このくらいなら誰でも既知している。彼女は、我が校で一番の有名な人だ。

恐らく在校生で九淨小夜の名を知らぬ者はいないだろう。

なんせ、人付き合いというものをほとんどせず、担任の名すらともに覚えていない俺でさえ、

彼女の名前だけは知っているのだ。

深窓の令嬢。

誰もが憧れる程の容姿を持っているのに、恋仲どころか友人すら作らない。

誰とも言葉を交わさず、交流らしい交流もしない彼女の噂は、良くも悪くも校内に広く流布している。

そして――。

今日も九淨小夜は天を仰いでいる。

何時からそうしているか。何時までそうしているのか。

登校途中、毎日のように見る彼女の姿はいつも同じで、何かしらの動作をとっている瞬間を一度も見た覚えが無い。

高校というものに入学して、早半年。

ぼんやりと過ごして来たこの時間は、長くも無いが短くもなかった。高低差のない、退屈と常識に塗れた高校生活。

だからだろう。何気なく目にする彼女はすんなりと俺の日常に溶け込んで、疑問に思うこともなくなっていた。

「…この時間になっても、やっぱりいるんだな」

予鈴などとつくに鳴り終わった。

もうじき、それぞれのクラスで授業前のSHRが始まり、長く変化

の無い一日が幕を開けるという時間。
それでもまだ彼女はここにいる。
じっと空を仰いだまま、ここにいる。

「…どうかしちまったのか、俺は」

どうでもいいことだ。彼女が何をしようと、何を見ていようと、自分には何の関わりも無い。

会話したことすらないのだ。毎日遠くから何となしに目にするだけで、全くの赤の他人である。

なのに、何故か今朝に限って妙な程気になってしまった。

結局彼女は何時頃になってから登校し、学校にいるその他大勢に混じっていくのがひどく知りたくなった。

この感覚を俺は知らない。好意とか、好奇心とか、そういうものではないと思う。

強いて言えば義務感などに近い。そうしなければならぬという、強迫観念じみた何かが、知らず頭の奥に巣食っていた。

——もう、行かなければ。

まともに考えれば、こんなことわざわざ遅刻してまで知るべきことではない。

さっきまでの思考こそが異常だったのだ。既に遅刻はしてしまっているが、このまま呆けて公園の入り口に突っ立っているよりか、せめて一時限目までに間に合うよう努力をした方がずっと建設的だろう。

踵を返してその場を去る。

関わりは持たない。だから、声をかけることもしない。

他人とは一定の距離を保たなければ、またいつ間違っただけで触れてしま

うか、わかったものではない。

じやり、と靴底が砂を擦る音。

公園に背を向け、再び学校へと向けて一歩踏み出した時。

「——あ」

微かな声が背後から聞こえた。

——無視すればよかった。聞こえなかったフリをして、立ち去ればよかった。

しかし俺は、条件反射でつい振り返り、声の主を直視してしまった。

「——」

視線が交差する。黒い瞳が、まっすぐに自分を射抜く。

九淨小夜。ベンチから立ち上がった彼女は、何か驚いた様子でじつとこちらを見たまま、固まっていた。

そこに、先程まで感じていた人形のような希薄さは無い。

その感情は正しく人間が持ち得るもので、だからだろう、人間味を宿した彼女は、今までに見てきたよりもずっと可憐だった。

息が止まる。言い様の無い感覚が、全身を支配する。

目が合った。それだけなのに、まるで全てを見透かされているような気分に陥る。

何を見ている。何を視ている。形のあるものか、それとも無形のものか。

あの瞳は、目には映らないものこそを視るのではないかと、そんなありもしない妄想を抱き——。

「っ、」

視線を切り、立ち去る。

これ以上ここにいたら何かが崩れる。理由は無いが、そんな気がしたのだ。

公園から遠ざかり、視界から消えるまでずっと、彼女はこちらを見ていた。

3 瀬尾時雨

「カズマ。俺は、お前ほどの変人を他に見たことがない」

妹尾時雨はそう言つて、どつかと正面の席に腰を下ろした。

盆の上には天麩羅そばが乗っている。七百五十円。高校生の昼飯にしては、豪華すぎる代物である。

少なくとも、俺から見ればそうなのである。

「随分といきなりな台詞だな」

「だってそうだろ？ 遅刻の言い訳なんて適当にすりやいいのに、

『ゆつくり歩いてきたからです』なんて馬鹿正直に言う奴初めて見た。

もしかして、今まで遅刻したことなかったから、言い訳の仕方がわからなかったのか？」

「ああ、それでいいや」

笹蕎麦をすすり、適当に答える。

時雨はその返答が大層不服らしく、分かり易くむくれている。

「…別にいいけどさー。お前がそういう奴だってことはわかってるし。

ただな、数少ない友人にくらい、愛想良くしても罰は当たらないんじゃない？」

「そういう奴だつてことがわかってるなら、諦めてくれ」

「そういう奴だつてことがわかってるから、改めて頼んでるんだけどな」

会話が進まない。面倒だ。

この話題は無視すると決めて、食事に集中する。

学食の笹蕎麦は味こそ平凡だが量は多い。

一食三百円で腹が十分に膨れるのは、学生としてありがたいことである。

「…いつも思うんだけど。それ、食べ難いだろ」

「それって、どれ」

「それはそれ。手袋。

一日中、ずっと嵌めたまま生活してるよな」

「悪いか」

「いや、悪くはない。珍しいだけ」

それはそうだろう。手袋を嵌めたまま一日を過ごしている奴など、自分以外に見たことがない。

初めは苦勞したが、今はこの生活にもすっかり馴染んだ。

何せ八年にもなるのだ。厚い手袋越しの箸やペンの扱いも、慣れたものである。

——変人。そう言った妹尾の言葉は実に正しい。

自分自身でそうだと認識し、理解しているのだ。

九淨小夜を含めて、自分以上の奇人変人はそういるものではないと、今でも思っている。

「そうだ。なあ妹尾」

「ん、何？」

「お前、九浄小夜をどう思う？」

「――」

名前を出した瞬間、妹尾は食べかけの蕎麦を口の端から垂らしたまま、石像のように固まった。

「え、ちよつと、何、お前の口から、女の名前が出てくるなんて――惚れたの？」

「惚れてない。ただ、気になっただけ」

「いや、お前が他人に関心を持つこと自体が、とんでもなく稀だろう」

確かにその通りである。

今まで自分以外の人間に興味など持たなかったし、これからもそのつもりだった。

多分、そういう感覚が元から希薄なのだろう。知ろうとする心。繋がるうとする精神。自分の中のどの部分を探っても、人間として当たり前前に持っていそうなそれらは無かった。

だから、きっと俺は人間ではないのだろう。

人を人足らしめているのは、そういった感情や心である。失われていれば、そんなものは獣と変わりはない。

「…やっぱいい。忘れてくれ」

「了解。忘れろと言うならすぐ忘れる」

目を瞑ってから、ずそぞと音を立てて妹尾は蕎麦をすする。
忘れろと言えば忘れる。貸せと言えば何でも貸す。

そういう奴だからこそ、こいつだけとは今も友人でいられる。

妹尾は俺を変人と評したが、こいつ自身もかなりの変人であることは間違いない。

それは例えば、男勝りの不自然な口調であったり。
俺なんかと好んで友人関係を結んでいることであったり。
類は友を呼ぶ。そんな言葉を思い出す。

「今日は暇か？」

「やることは無い」

家に帰れば、待っているのは洗濯と夕飯の支度である。
ああそれと、クリアまでもう一息のRPGがあった。

「じゃあ、うち来いよ。」

食べ物と娯楽だけは豊富だぜ」

「やだよ。お前は嫌いじゃないけど、他人と接触するのは嫌いなんだ。」

学校で顔付き合わせるので、精一杯」

「そうか。なら仕方ないわな。また今度、諦めずに誘ってみる」

その今度が来たところで、答えが変わると思えない。
妹尾とてそのことをよく理解しているのだろう。

残念がる素振りも見せなければ、口調もいたって平坦なものである。

笹蕎麦を食べ終えた。

見れば、いつの間にか妹尾も天麩羅蕎麦を平らげている。

学生たちの喧騒に包まれた食堂。食事のため仕方なく来てはいるが、あまり好んで長いしたい場所ではない。

自分以外の人間が多く居る。

それだけで、途方も無い重圧を感じる。

人が嫌いなのでは無い。そこにいるから、嫌いなのだ。
だけど、他人以上に俺は――。

「教室戻ろうぜ。ここよりか、人は少ないだろ」

「ああ」

自分自身が、嫌いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4349/>

青色の空

2011年1月27日09時34分発行